

## 事後調査の結果

調査項目（生物・生態系：鳥類）

### 1. 調査事項

#### (1) 予測した事項

岸壁工事、ヤード工事及び道路工事に伴う鳥類相の変化の内容及びその程度

#### (2) 予測条件の状況

- ・ 工事の状況

#### (3) 環境保全のための措置の実施状況

## 2. 調査地域

調査地域は、図3-1に示す事業区域の陸域及び事業区域前面の水域とした。



図3-1 調査範囲

### 3. 調査手法

#### (1) 調査時点

工事施行中の四季を代表する各2日として、表3-1に示す時期に実施した。

なお、環境保全のための措置の実施状況の確認については、平成26年4月～平成30年3月に実施した。

表3-1 調査時期

調査時期	調査区分	調査年月日
平成27年度第3四半期（秋季）	定点センサス調査	平成27年10月14日
	ラインセンサス調査	平成27年10月13日
	補足調査	平成27年10月14日
平成27年度第4四半期（冬季）	定点センサス調査	平成28年1月28日
	ラインセンサス調査	平成28年1月27日
	補足調査	平成28年1月28日
平成28年度第1四半期（春季）	定点センサス調査	平成28年5月9日
	ラインセンサス調査	平成28年5月10日
	補足調査	平成28年5月9日
平成28年度第2四半期（夏季）	定点センサス調査	平成28年8月26日
	ラインセンサス調査	平成28年8月25日
	補足調査	平成28年8月26日

#### (2) 調査地点

##### ア. 予測した事項

図3-1に示す事業区域内及び事業区域周辺の2地点並びに事業区域内のラインで行った。また、定点センサス調査及びラインセンサス調査では観察できない場所、時間帯について、事業区域内を任意に踏査して補足調査を行った。

##### イ. 予測条件の状況

事業区域内とした。

##### ウ. 環境保全のための措置の実施状況

事業区域内とした。

### (3) 調査方法

#### ア. 予測した事項

鳥類の調査方法は、表3-2に示す方法で行った。

表3-2 鳥類の調査方法

調査項目	頻度	調査方法
定点センサス調査	各季1日3回 (早朝、昼、夕刻の1時間)	調査地点を中心として概ね半径300m以内に出現する鳥類について、出現種、個体数、行動等を確認する。
ラインセンサス調査	各季1日(午前中)	設定したルート上を約2km/時間で踏査しながらライン上の両側約25m(全幅50m)内に出現する鳥類について、目視確認、鳴き声により識別し、出現種、個体数等を確認する。
補足調査	定点センサス調査とラインセンサス調査以外の時間	定点センサス調査とラインセンサス調査では観察できない場所、時間帯について、調査範囲内を踏査し、出現種を記録する。

#### イ. 予測条件の状況

工事の状況については、現地確認(写真撮影等)及び工事関係資料により整理を行った。

#### ウ. 環境保全のための措置の実施状況

現地確認(写真撮影等)及び工事関係資料により整理を行った。

#### 4. 調査結果

##### (1) 事後調査の結果の内容

##### ア. 予測した事項

##### (ア) 鳥類の生息環境の変化の程度

事業区域が位置する中央防波堤外地区は、評価書時と同様、人工地が広い範囲を占めており、植生は造成地に立地したエノコログサなどの草丈の低い草本群落やヨシなどの草丈の高い湿性草本群落が見られたが、タカ目、ハト目、スズメ目といった山野の鳥類が休息やねぐら、採餌場に利用する樹木は存在しなかった。また、事後調査時は、造成地のくぼ地に、降雨等により形成された一時的な湿地（水溜り）が点在していた。この湿地（水溜り）は、ペリカン目やチドリ目など、水辺の鳥類の生息場・採餌場として利用されていた。このほか、事後調査時は、岸壁工事やヤード工事に伴う建設機械の稼働がみられ、春季にはヤードの草刈りにより裸地が拡大していた。

事業区域周辺海域は、評価書時と同様、カイツブリ目、ペリカン目（旧コウノトリ目含む）、カモ目、チドリ目といった水辺の鳥類の休憩場となっていた。水際部は、事後調査時では、整備後の岸壁上で休息するカモメ類が多く確認された。このほか、事後調査時は、岸壁工事に伴う建設機械の稼働がみられた。

##### (イ) 鳥類の生息状況の変化の程度

事後調査で確認された鳥類は、表3-3～表3-8に示すとおりである。

定点センサス調査では、主な視野が陸域である調査地点1で7目21科31種、主な視野が陸域及び前面の水域である調査地点2で10目22科41種、両地点を合わせると10目24科46種が確認された。このほか、ラインセンサス調査で10目25科41種、補足調査で10目24科51種が確認された。確認種は、草地、湿地（水溜り）、裸地等の人工地や水域を主な生息環境とする東京湾周辺で一般にみられる種が多く、樹林性の種が少ない傾向がみられた。

このうち、最も種数が多かったのはスズメ目であり、定点センサスで17種、ラインセンサスで19種であった。次いでチドリ目が定点センサスで12種、ラインセンサスで9種であった。また、外来種（帰化種）はハト目の1種が確認された。

草刈りや整地、天候等の条件により、調査地内に広がっていた草地や降雨等により形成された一時的な湿地（水溜り）の位置や規模は、調査時期ごとに変化したが、残存する一部のヨシ原や低茎草地ではヒバリやセキレイ類が頻繁に確認され、これらの種は稼働する建設機械の周辺で採餌する姿も確認された。

湿地（水溜り）周辺では、浅瀬や干潟等を利用するチドリ目のメダイチドリ、チュウシャクシギ、キョウジョシギ、トウネン、コチドリが確認された。このほか、ハヤブサ等の猛禽類、コアジサシ等の裸地を生息場とする鳥類、ヨシゴイ、ツバメ、オオヨシキリといった草地を生息場とする鳥類も確認された。

このほか、春季調査では、ヤードの草刈りにより裸地が拡大したことにより、コアジサシの産卵に好適な環境が出現し、コアジサシの営巣・抱卵が確認された。コアジサシは夏季調査では確認されておらず、繁殖後、巣立ったものと考えられる。

事業区域周辺海域は、マガモやカンムリカイツブリ等の水辺の鳥類の休憩場となっていたほか、新たに整備されたジャケット式の岸壁上では、ウミネコやセグロカモメ等のカモメ類が多く休息していた。

#### (ウ) 注目される種

事後調査（定点センサス調査、ラインセンサス調査、補足調査）で確認された鳥類のうち注目される種は、表3-9に示すとおりである。

事後調査により確認された注目される種は8目16科33種であり、このうちコアジサシは抱卵を確認し、事業区域又は事業区域周辺の一部を繁殖地として利用する様子が確認された。コアジサシの抱卵が本事業に係る調査で確認されたのは初めてであり、繁殖期前にあたる春季に、ヤードの草刈りにより裸地が拡大したことで、コアジサシの産卵に好適な環境が出現したことが一因と考えられる。

降雨等により形成された一時的な湿地（水溜り）では、コチドリやシロチドリ等のチドリ類や、キアシシギやキョウジョシギ等のシギ類が確認された。その他、草地や裸地では、探餌や採食をするチュウヒ、ノスリ、チョウゲンボウ等の猛禽類が確認された。

また、ヒバリは、事業区域及びその周辺の草地や裸地において広く確認された。繁殖に係る状況として事業区域外の草地において交尾が確認されたが、営巣の確認には至らなかった。

その他、秋季調査において、造成地上空を飛行するヒシクイが確認された。ヒシクイは「東京湾の鳥類」（桑原ほか 2000）によれば、多摩川河口において1980年以降記録がないとされ、移動中の個体が偶然調査中にみられたものと考えられる。

なお、評価書時の現況調査と事後調査結果との比較一覧は、表3-10に示すとおりである。

表3-3 鳥類調査結果（定点センサス調査）

調査時期 項目	平成27年度		平成28年度		年間	
	秋季	冬季	春季	夏季		
調査地点1	総種類数	4目11科15種	6目13科17種	4目9科11種	5目10科11種	7目21科31種
	総個体数	37	36	52	28	153
	主な確認種 (%)	ヒバリ (27.0) ハシブトガラス(10.8) モズ(10.8)	ハシブトガラス(13.9) ヒバリ (11.1) ツグミ(11.1) タヒバリ (11.1)	コアジサシ(30.8) オオヨシキリ (28.8) ヒバリ (15.4)	セッカ(32.1) スズメ(14.3) ハシブトガラス(10.7) ヒバリ (10.7) ツバメ(10.7)	ヒバリ (16.3) コアジサシ (10.5)
調査地点2	総種類数	7目14科19種	5目11科18種	8目16科22種	6目13科16種	10目22科41種
	総個体数	55	47	75	46	223
	主な確認種 (%)	ヒバリ (14.5) セッカ(12.7)	ヒバリ (12.8) カンムリカイツブリ(10.6)	コアジサシ(16.0) カワウ(12.0)	カワウ(15.2) セッカ(13.0) チョウゲンボウ(10.9)	カワウ(10.3)

注：1. ( ) 内の数値は、総個体数に対する比率 (%) を示す。

2. 主な確認種は、上位3種かつ10%以上を記載した。

表3-4 鳥類調査結果（ラインセンサス調査）

調査時期 項目	平成27年度		平成28年度		年間
	秋季	冬季	春季	夏季	
総種類数	7目17科23種	5目12科16種	4目12科17種	3目7科7種	10目25科41種
総個体数	61	47	57	46	211
主な確認種 (%)	ヒバリ (26.7) スズメ(13.3)	ヒバリ (14.9) オオジュリン (14.9) タヒバリ (12.8)	コアジサシ(31.6) オオヨシキリ (17.5)	セッカ(34.8) ヒバリ (26.1) チョウゲンボウ(10.9) ツバメ(10.9)	ヒバリ (19.0)

注：1. ( ) 内の数値は、総個体数に対する比率 (%) を示す。

2. 主な確認種は、上位3種かつ10%以上を記載した

表3-5 鳥類調査結果（補足調査）

調査時期 項目	平成27年度		平成28年度		年間
	秋季	冬季	春季	夏季	
総種類数	7目15科23種	7目12科20種	6目11科18種	6目13科19種	10目24科51種
補足調査のみの確認種	コガモ タシギ セグロセキレイ	マガモ ハシビロガモ オナガガモ ハジロカイツブリ アオサギ モズ ヒヨドリ ホオジロ	ダイサギ コサギ メダイチドリ チュウシャクシギ トウネン トビ ハヤブサ カワラバト (ドバト)	カルガモ ヨシゴイ キアシシギ オオセグロカモメ オオヨシキリ	ハシビロガモ コガモ ハジロカイツブリ ヨシゴイ メダイチドリ タシギ チュウシャクシギ トウネン ハヤブサ セグロセキレイ ホオジロ

注：補足調査のみの確認種は、全ての種類を記載した。

表3-6 鳥類調査結果（定点センサス調査）

No.	目	科	種名	調査地点1				調査地点2			
				秋季	冬季	春季	夏季	秋季	冬季	春季	夏季
1	カモ	カモ	マガモ					●			
2			カルガモ	●		●		●		●	
3			オナガガモ	●							
4	カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ						●		
5	ハト	ハト	キジバト							●	●
6	カツオドリ	ウ	カワウ		●		●	●	●	●	●
7	ペリカン	サギ	ゴイサギ							●	
8			アオサギ			●	●			●	●
9			ダイサギ	●	●			●			
10			コサギ					●			
11	ツル	クイナ	バン							●	
12	チドリ	チドリ	コチドリ			●				●	
13			シロチドリ			●					
14		シギ	アオアシシギ								●
15			キアシシギ			●					●
16			イソシギ								●
17			キョウジョシギ								●
18			ハマシギ						●		
19			カモメ	ウミネコ		●			●		●
20		セグロカモメ						●	●	●	●
21		オオセグロカモメ							●		
22		コアジサシ				●					●
23		アジサシ									●
24		タカ	ミサゴ	●			●		●	●	●
25	タカ		トビ	●	●		●	●	●		●
26			チュウヒ	●				●			
27			ノスリ		●				●		
28	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	●	●		●	●	●	●	
29	スズメ	モズ	モズ	●							
30		カラス	ハシボソガラス	●				●	●		●
31			ハシブトガラス	●	●		●	●	●	●	
32		ヒバリ	ヒバリ	●	●	●	●	●	●	●	●
33		ツバメ	ツバメ				●			●	●
34		ヨシキリ	オオヨシキリ			●				●	
35		セッカ	セッカ	●		●	●			●	●
36		ムクドリ	ムクドリ	●	●	●					
37		ヒタキ	ツグミ		●				●		
38			ジョウビタキ						●		
39			イソヒヨドリ		●			●	●		
40		スズメ	スズメ	●	●		●	●	●	●	●
41		セキレイ	ハクセキレイ	●	●	●		●	●	●	●
42	タヒバリ			●				●			
43	アトリ	カワラヒワ					●				
44	ホオジロ	アオジ		●							
45		オオジュリン		●				●			
46	(ハト)	(ハト)	カワラバト(ドバト)		●		●	●			
10目24科46種				15種	17種	11種	11種	19種	18種	22種	16種
				7目21科31種				10目22科41種			

注：1. 鳥類の分類は「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会、2012年）に準拠した。  
 2. ( ) は、外来種を示す。



表3-7 鳥類調査結果（ラインセンサス調査）

No.	目	科	種名	秋季	冬季	春季	夏季
1	カモ	カモ	ヒシクイ	●			
2			カルガモ			●	
3			オナガガモ	●			
4			スズガモ		●		
5	カツオドリ	ウ	カワウ		●	●	
6	ペリカン	サギ	アオサギ	●			
7			ダイサギ	●			
8	ツル	クイナ	オオバン		●		
9	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ	●			
10	チドリ	チドリ	イカルチドリ				●
11			コチドリ			●	
12			シロチドリ			●	
13		シギ	キアシシギ	●		●	
14			イソシギ	●		●	
15			キョウジョシギ			●	
16		カモメ	ウミネコ	●	●		
17			コアジサシ			●	
18			アジサシ			●	
19		タカ	ミサゴ	●			
20	タカ		トビ	●			●
21	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ				●
22	スズメ	モズ	モズ	●			
23		カラス	ハシブトガラス	●	●	●	
24		ヒバリ	ヒバリ	●	●	●	●
25		ツバメ	ショウドウツバメ	●			
26			ツバメ	●		●	●
27		ヒヨドリ	ヒヨドリ	●			
28		ヨシキリ	オオヨシキリ			●	
29		セッカ	セッカ		●	●	●
30		ムクドリ	ムクドリ	●		●	
31		ヒタキ	ツグミ		●		
32			ジョウビタキ		●		
33			ノビタキ	●			
34			イソヒヨドリ	●	●		
35		スズメ	スズメ	●	●	●	●
36		セキレイ	ハクセキレイ	●	●	●	
37			タヒバリ		●		
38		アトリ	カワラヒワ	●	●		
39		ホオジロ	アオジ		●		
40	オオジュリン			●			
41	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)	●			
10目25科41種				23種	16種	17種	7種

注：1. 鳥類の分類は「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会、2012年）に準拠した。

2. ( ) は、外来種を示す。

表3-8 鳥類調査結果（補足調査）

No.	目	科	種名	秋季	冬季	春季	夏季
1	カモ	カモ	マガモ	●	●		
2			カルガモ	●			●
3			ハシビロガモ		●		
4			オナガガモ	●	●		
5			コガモ	●			
6			スズガモ		●		
7	カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ		●		
8			ハジロカイツブリ		●		
9	カツオドリ	ウ	カワウ	●	●	●	
10	ペリカン	サギ	ヨシゴイ				●
11			アオサギ	●	●		●
12			ダイサギ	●		●	
13			コサギ	●		●	
14	ツル	クイナ	オオバン		●		
15	チドリ	チドリ	イカルチドリ				●
16			シロチドリ			●	
17			メダイチドリ			●	
18		シギ	タシギ	●			
19			チュウシャクシギ			●	
20			キアシシギ			●	●
21			イソシギ			●	●
22			キョウジョシギ			●	
23			トウネン			●	
24			カモメ	ウミネコ	●		
25		セグロカモメ		●			
26		オオセグロカモメ					●
27		コアジサシ				●	
28		タカ	ミサゴ	●		●	●
29	タカ		トビ	●	●	●	●
30			ノスリ		●		
31	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	●	●		●
32			ハヤブサ			●	
33	スズメ	モズ	モズ	●	●		
34		カラス	ハシボソガラス	●			●
35			ハシブトガラス			●	●
36		ヒバリ	ヒバリ	●			●
37		ツバメ	ツバメ			●	
38		ヒヨドリ	ヒヨドリ		●		
39		ヨシキリ	オオヨシキリ				●
40		セッカ	セッカ				●
41		ヒタキ	ツグミ		●		
42			ジョウビタキ		●		
43			イソヒヨドリ	●	●		
44		スズメ	スズメ	●		●	●
45		セキレイ	ハクセキレイ	●			●
46			セグロセキレイ	●			
47			タヒバリ		●		
48		アトリ	カワラヒワ	●			
49		ホオジロ	ホオジロ		●		
50			オオジュリン		●		
51	ハト	ハト	カワラバト(ドバト)	●		●	●
10目24科51種				23種	20種	18種	19種

注：1. 鳥類の分類は「日本鳥類目録 改訂第7版」（日本鳥学会、2012年）に準拠した。

2. ( ) は、外来種を示す。

表3-9 注目される種一覧

No.	目	科	種名	①	②	③	④	
1	カモ	カモ	ヒシクイ	天		VU	EX	
2			スズガモ				留	
3	カイツブリ	カイツブリ	カンムリカイツブリ				留	
4	ペリカン	サギ	ヨシゴイ			NT	CR	
5			ダイサギ				VU	
6			コサギ				VU	
7	ツル	クイナ	バン				VU	
8			オオバン				VU	
9	チドリ	チドリ	イカルチドリ				DD	
10			コチドリ				VU	
11			シロチドリ			VU	VU	
12			メダイチドリ				NT	
13		シギ		タシギ				VU
14				チュウシャクシギ				VU
15				アオアシシギ				NT
16				キアシシギ				VU
17				イソシギ				VU
18				キョウジョシギ				VU
19				トウネン				NT
20				ハマシギ			NT	NT
21	カモメ		コアジサシ			VU	EN	
22	タカ	ミサゴ	ミサゴ			NT	EN	
23		タカ	トビ				NT	
24			チュウヒ			EN	EN	
25			ノスリ				EN	
26	ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ				EN	
27			ハヤブサ		国内	VU	EN	
28	スズメ	モズ	モズ				VU	
29		ヒバリ	ヒバリ				VU	
30		ヨシキリ	オオヨシキリ				VU	
31		ヒタキ	イソヒヨドリ				DD	
32		セキレイ	セグロセキレイ				VU	
33		ホオジロ	オオジュリン				NT	
8目16科33種				1種	1種	8種	33種	

注：1. 選定基準は、以下のとおりである。

- ① 「文化財保護法」(昭和25年法律第214号)に基づく天然記念物等に指定されている種
- ② 「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成4年法律第75号)において希少野生動植物種に指定されている種
- ③ 「第4次レッドリストの公表について(お知らせ)」(環境省、平成24年)及び「環境省レッドリスト2019の公表について」(環境省、平成31年)において絶滅、野生絶滅、絶滅危惧、準絶滅危惧、情報不足、絶滅のおそれのある地域個体群に指定されている種
- ④ 「東京都の保護上重要な野生生物種(本土部)～東京都レッドリスト～2010年版」(東京都、平成22年)において絶滅危機、絶滅危惧、絶滅危急、希少、地域個体群、留意種に指定されている種

2. 選定基準の記号の区分は、以下のとおりである。

国内：国内希少野生動植物種 国際：国際希少野生動植物種  
 CR：絶滅危惧ⅠA類 EN：絶滅危惧ⅠB類 VU：絶滅危惧Ⅱ類 NT：準絶滅危惧  
 DD：情報不足 留：留意種

3. 種名及び配列は、「日本鳥類目録 改訂第7版」(日本鳥学会、2012年)に準拠した。

表3-10(1) 評価書の結果と事後調査の結果との比較一覧

No.	目名	科名	種名	確認種			注目される種	
				評価書時の 現況調査	事後調査			
					平成24年度 (参考)	平成27年度 ～ 平成28年度*		
1	カモ	カモ	ヒシクイ			●	●	
2			オカヨシガモ		●			
3			マガモ	●	●	●		
4			カルガモ	●	●	●		
5			ハシビロガモ	●	●	●		
6			オナガガモ	●	●	●		
7			コガモ	●		●		
8			ホシハジロ	●				
9			スズガモ	●	●	●	●	
10			ミコアイサ	●			●	
11	カイツブリ	カイツブリ	カイツブリ		●		●	
12			カンムリカイツブリ	●		●	●	
13			ハジロカイツブリ	●		●		
14	ハト	ハト	キジバト	●	●	●		
15	カツオドリ	ウ	カワウ	●	●	●		
16	ペリカン	サギ	ヨシゴイ			●	●	
17			ゴイサギ			●		
18			アオサギ	●	●	●		
19			ダイサギ	●	●	●	●	
20			コサギ	●	●	●	●	
21	ツル	クイナ	バン	●	●	●	●	
22			オオバン	●	●	●	●	
23	アマツバメ	アマツバメ	アマツバメ			●		
24	チドリ	チドリ	ムナグロ	●	●		●	
25			イカルチドリ			●	●	
26			コチドリ	●	●	●	●	
27			シロチドリ	●	●	●	●	
28			メダイチドリ	●	●	●	●	
29		セイタカシギ	セイタカシギ		●		●	
30		シギ	タシギ	●	●	●	●	
31			チュウシャクシギ	●	●	●	●	
32			アオアシシギ		●	●	●	
33			タカブシギ	●			●	
34			キアシシギ	●	●	●	●	
35			イソシギ	●	●	●	●	
36			キョウジョシギ	●	●	●	●	
37			トウネン	●	●	●	●	
38			ウズラシギ		●		●	
39			ハマシギ		●	●	●	
40			ツバメチドリ	ツバメチドリ		●		●
41			カモメ	ユリカモメ	●	●		
42				ウミネコ	●	●	●	
43	カモメ			●				
44	セグロカモメ	●		●	●			
45	オオセグロカモメ	●		●	●			

注：1. \*は、平成27年度秋季～平成28年度夏季を示す。

2. 網掛けは、評価書時の現況調査と事後調査で共通する確認種を示す。

表3-10(2) 評価書の結果と事後調査の結果との比較一覧

No.	目名	科名	種名	確認種			注目される種
				評価書時の 現況調査	事後調査		
					平成24年度 (参考)	平成27年度 ～ 平成28年度*	
46	チドリ	カモメ	コアジサシ	●	●	●	●
47			アジサシ		●	●	
48	タカ	ミサゴ	ミサゴ	●	●	●	●
49		タカ	トビ	●	●	●	●
50			チュウヒ	●	●	●	●
51			オオタカ		●		●
52			ノスリ	●	●	●	●
53			ハヤブサ	ハヤブサ	チョウゲンボウ	●	●
54	ハヤブサ	●				●	●
55	スズメ	モズ	モズ	●		●	●
56		カラス	ハシボソガラス	●	●	●	
57			ハシブトガラス	●	●	●	
58		ヒバリ	ヒバリ	●	●	●	●
59		ツバメ	ショウドウツバメ			●	
60			ツバメ	●	●	●	
61		ヒヨドリ	ヒヨドリ	●	●	●	
62		ウグイス	ウグイス	●			●
63		ヨシキリ	オオヨシキリ	●	●	●	●
64		セッカ	セッカ	●	●	●	
65		ムクドリ	ムクドリ	●	●	●	
66		ヒタキ	ツグミ	●	●	●	
67			ジョウビタキ		●	●	
68			ノビタキ	●	●	●	
69			イソヒヨドリ	●	●	●	●
70		スズメ	スズメ	●	●	●	
71		セキレイ	ハクセキレイ	●	●	●	
72			セグロセキレイ	●	●	●	●
73			タヒバリ	●	●	●	
74		アトリ	カワラヒワ	●	●	●	
75	マヒワ			●			
76	ホオジロ	ホオジロ	●		●		
77		ホオアカ	●				
78		カシラダカ	●				
79		アオジ		●	●		
80		オオジュリン	●	●	●	●	
81	(ハト)	(ハト)	カワラバト(ドバト)	●	●	●	
82	(スズメ)	カエデチョウ	ベニスズメ	●			
種数	12 目	31 科	82 種	64 種	62 種	65 種	42 種

- 注：1. \*は、平成27年度秋季～平成28年度夏季を示す。  
 2. 網掛けは、評価書時の現況調査と事後調査で共通する確認種を示す。  
 3. ( ) は、外来種を示す。

#### イ. 予測条件の状況

鳥類調査時の主な工事である岸壁工事、ヤード工事及び道路工事の状況は、表3-11及び写真3-1に示すとおりである。なお、調査期間中の建設機械の稼働状況は「別添3 資料編 3. 生物・生態系（鳥類）（2）建設機械、工事船舶の稼働状況」（p. (46)～(47)）に示した。

表3-11 主な工事の状況

調査時期 項目		平成27年度		平成28年度	
		秋季（第3四半期）	冬季（第4四半期）	春季（第1四半期）	夏季（第2四半期）
岸壁工事	本事業	舗装撤去・復旧工事 土工 既設護岸上部撤去工 渡版受枠設置工	該当なし	該当なし	舗装撤去・復旧工事 土工 既設護岸上部撤去工
	関連事業	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし
ヤード工事	本事業	土工	土工 路床工 路盤工	該当なし	該当なし
	関連事業	該当なし	該当なし	該当なし	土工
道路工事	本事業	管きよ工・街きよ工	土工 管きよ工・街きよ工 路盤工 舗装工	該当なし	該当なし
	関連事業	該当なし	該当なし	該当なし	該当なし

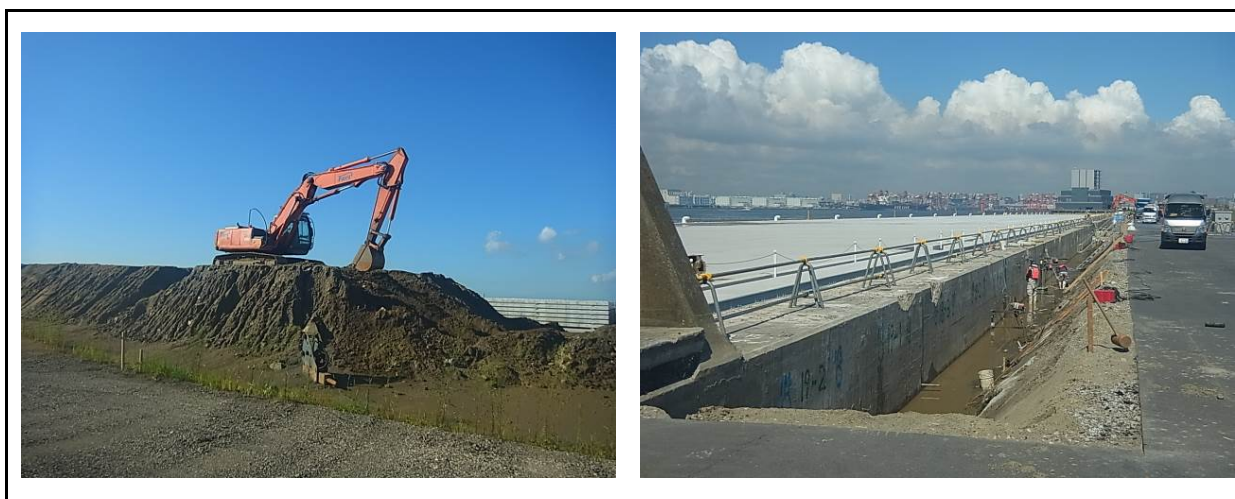


写真3-1 工事の状況



り。環境保全のための措置の実施状況

環境保全のための措置の実施状況は、表3-12に示すとおりである。なお、鳥類の生息状況の変化等に関する苦情はなかった。

なお、春季に、コアジサシが造成地の一部を繁殖地として利用する様子が確認されたため、写真3-2に示すとおり営巣地への立ち入り時の注意点及び営巣地周辺の工事における注意点をまとめ、パンフレット等により施工業者に周知するとともに、コアジサシの営巣・抱卵シーズンにおける対応を講じた。また、当該箇所の工事の再開は夏季調査によりコアジサシの巣立ちを確認した後に行った。

表3-12 環境保全のための措置の実施状況（生物・生態系：鳥類）

環境保全のための措置	実施状況
排出ガス対策型建設機械、低燃費型建設機械を積極的に採用する。	排出ガス対策型建設機械については「建設機械に関する技術指針」（平成3年建設省経機初第247号）及び「特定特殊自動車排出ガスの規制等に関する法律」（平成17年法律第51号）、低公害車については「低炭素型建設機械の認定に関する規程」（平成22年国総施環第321号）に基づき、排出ガス対策型建設機械及び低公害車を採用する等の対策を行った。 排出ガス対策型建設機械及び低公害車の使用状況は、写真1-3（p. 21～22）、写真3-3及び写真3-4に示すとおりである。
工事従事者に対して環境保全に関する教育を通じて、工事用車両や建設機械の省燃費運転を推進するとともに、アイドリング・ストップを徹底する。	工事従事者に対して、施工連絡会議や朝礼、工事車両運行協議連絡会等を通して環境保全教育を行うとともに、急発進及び停車・休憩時のアイドリング・ストップを徹底した。 施工連絡会議の状況は、写真3-5に示すとおりである。
工事等の施行箇所の集中化を避けるとともに、工事量の平準化を図り、早朝及び夜間工事は実施しないものとする。	工事の施行箇所の集中化を避けるために、定期的な施工連絡会議を行い、工事量の平準化を図った。また、早朝、夜間の工事は行わなかった。
工事の施行に当たっては、低騒音型・低振動型の工事用機械を積極的に採用する。	「建設工事に伴う騒音振動対策技術指針」（建関技第103号）、「低騒音型・低振動型建設機械の指定に関する規程」（平成13年国土交通省告示第487号）に基づき、低騒音型建設機械を採用した。なお、低振動型建設機械の使用はなかった。 低騒音型建設機械の使用状況は、写真1-3（p. 21～22）及び写真3-4に示すとおりである。
埋立地等から土砂等の飛散防止、粉じんの発生防止のため散水等の措置を行う。	事業区域内の道路に清掃員の配置等の処置を講じ、清掃及び散水を行い粉じんの発生防止に努めた。 清掃及び散水の状況は写真1-5（p. 23）、写真1-6（p. 23）に示すとおりである。
浚渫中に濁りを極力発生させないようにグラブ浚渫船は、密閉蓋式グラブを使用する。	平成26年度、平成29年度は関連工事において浚渫を実施し、浚渫中に濁りを極力発生させないようにグラブ浚渫船は、密閉蓋式グラブを使用した。密閉蓋式グラブの使用状況は写真3-6に示すとおりである。
濁りの拡散防止のため、汚濁防止膜を使用する。	平成26年度、平成29年度は関連工事において浚渫を実施し、濁りの拡散防止のため、汚濁防止膜を使用した。汚濁防止膜の設置状況は写真3-7に示すとおりである。

## 工事区域への立ち入りに際する配慮のお願い

～コアジサシの営巣・抱卵が確認されています～

- ◆ヤード内（特に砂礫の裸地）の立入は極力避けるようにお願いします。
- ◆抱卵しているコアジサシや卵と思われるものを発見した場合は、そのままにしてください。

東京都港中央防波堤外側地区岸壁周辺において、環境調査を行った結果、工事区域のうち砂礫の裸地となっているヤード内で注目される種のコアジサシの営巣・抱卵が確認されました。

コアジサシは開けた砂礫地等からなる環境を営巣地とするため、今後8月にかけて、工事区域内で営巣・抱卵するつがいが増える可能性があります。

ヤード内に立ち入る際及びヤード近くでの工事を行う場合には、現地状況に応じて下記の配慮をお願いします。

- ◆**営巣期間中(5月～8月中旬ころ)までは工食用道路以外の区域への車両の乗り入れ、砂礫地への立ち入りは極力避けるようにお願いします。**
- ◆立入が必要となった場合は、発注者を通じ、東京港湾事務所防災環境企画課に以下をお知らせください。
  - ①立入箇所、②方法(例:2名、普通車2台)、③作業内容(例:踏査、測量等)
- ◆事前の踏査または作業中に、**コアジサシの抱卵している親鳥、巣や卵、雛と思われるものを発見した場合には、近づかず、現場保存を行ってください。**
- ◆コアジサシの抱卵している親鳥、巣や卵、雛と思われるものを確認した場合は、以下の事項を東京港湾事務所防災環境企画課まで報告いただけますと幸いです。
  - ①おおまかな位置
  - ②確認日
  - ③確認内容(例:卵を確認、地面に座りじっとしている親鳥を確認、等)
- ◆周辺で工事などを行う際は、低騒音工事を行うよう、配慮をお願いいたします。

**コアジサシ** チドリ目カモメ科アジサシ属 *Sterna albifrons*  
 (種の保存法:国際希少野生動物、環境省 RL:絶滅危惧Ⅱ類  
 東京都 RDB 絶滅危惧ⅠB類)

### 【形態・生態】

体長26cm。アジサシより一回り小さい小型のアジサシ。成長翼は頭頂から後頭が過眼線とつながり黒い。顔から眼の上と喉から側頭、胸、体下面にかけては白い。頻りにダイビングをして採餌する。

### 【分布の概要】

夏鳥として本州以南に渡来し繁殖する。海岸、港、河口、河川、湖沼、池などに生息する。

### 【都における生息環境】

海岸や河川、池沼で採食しているのがよく見られる。埋立地の裸地が減少し、営巣環境は極めて限られている。

### 【都における生存に対する脅威や保全上の留意点】

営巣地となる裸地の減少、営巣地への釣り人などの立ち入りによるかく乱、カラス類による卵や雛の捕食などが、本種の生存を脅かす要因である。現存の生息地を可能な限り保全することや、必要に応じて、営巣地への立ち入りについて注意喚起を行うことが望ましい。

注：上記は以下の文献を参照した。

「日本の野鳥590」(株)平凡社、平成12年)  
 「レッドデータブック東京2013」(東京都、平成25年)



### 上記に関するお問い合わせ

国土交通省 関東地方整備局 東京港湾事務所  
 東京都 港湾局 港湾整備部 計画課  
 東京港埠頭株式会社 技術部 計画調整課

写真3-2(1) 営巣地への立ち入り時の注意点に関するパンフレット





写真3-2(2) 吹き流しによるコアジサシの営巣・抱卵対応範囲

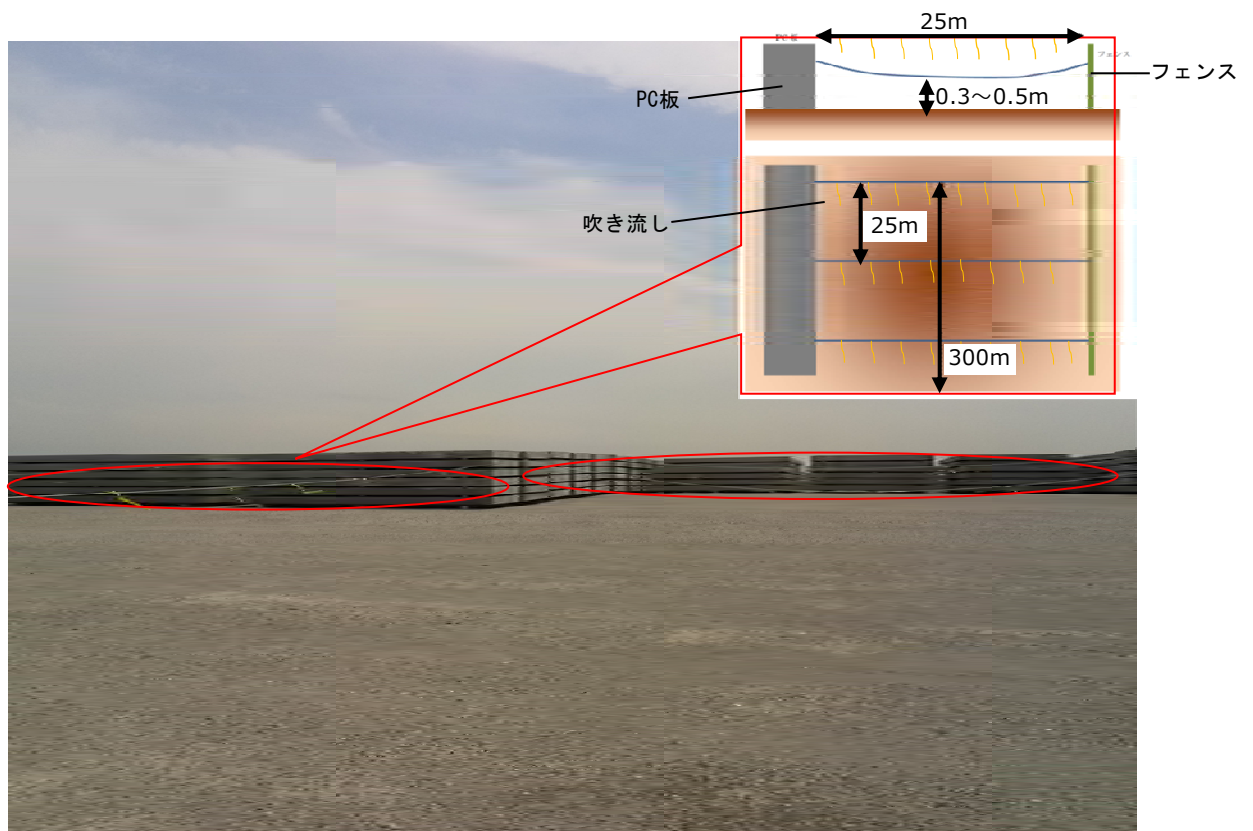


写真3-2(3) 吹き流しによるコアジサシの営巣・抱卵対応